

〔大阪城南女子短期大学研究紀要 第58巻 17 ～ 32頁 令和6年3月〕

教育実習の振り返りと課題

— アンケート分析からの一考察 —

油井 宏隆・山田 千智
柴田 精一・佐藤 佳枝

〔論文〕

教育実習の振り返りと課題 —アンケート分析からの一考察—

油井 宏隆・山田 千智
柴田 精一・佐藤 佳枝

要旨

本研究は、幼稚園教諭・保育士を養成する短期大学において、2年生を対象として、学外実習に関わる1年次からの自己の成長と課題についての意識をアンケート調査し、その結果を考察したものである。また、その結果を授業内容の向上に役立てようとするものである。

調査の結果から、2年生の多くが「設定保育」に対して成長を感じており、課題を抱えていることが明らかとなった。また、2年前期の時点において、学生は自身の保育技術や能力向上に主眼を置き、保育者の仕事理解やチームワークについてはあまり意識が向いていないという傾向が見られたことはたいへん興味深い。これらの結果は、今後の実習指導の在り方や実習中のサポート体制についての検討に資するものである。

はじめに

幼稚園教諭免許・保育士資格が取得できる短期大学では、1年次後半からそれら免許・資格に関わる学外実習が実施されることが多い。この度調査を実施した大阪城南女子短期大学においても、学生は1年次後半に初めての学外実習を体験することとなるが、そこで学生が感じる負担は大きく、初めての事ばかりだ。多くの学生が、高校を卒業してから1年も経っておらず、学校外での実習経験は少ない。一方、幼稚園教諭免許に関わる学外実習であれば、学生は一定期間幼稚園に勤務し、幼稚園教諭の職務全体を理解しながら、幼児教育を実際的に学び、実習の終わりには実習先から評価される。

このギャップは少なからず学生を苦しめているようである。ごく少数ではあるが、初めての学外実習での躓きから立ち直れず、退学にまで至ったケースもある。保育者になる希望を抱き入学してきた学生がそのようになってしまうことは残念な結果である。

筆者らは2022年度から、大阪城南女子短期大学にて「教育実習Ⅰ(1年次通年)」「教育実習Ⅱ(2年次前期)」を担当している。授業では、学外実習に関わる事前・事後学習や、日誌・指導案の記入方法等を扱ってきた。また、保育者としての実務経験のある教員が、現場経験のない学生でも取り入れやすい遊びや活動、教材を紹介し、実践的な内容となるよう工夫してきた。この度、

その授業内容が適切なものであったかを判断し、より良い授業内容を構築することを目的として、2年生を対象に、教育実習に関わる1年次からの自己の成長と課題についての意識をアンケート調査して、その結果を考察する。

1 調査方法

対象者：2023年次大阪城南女子短期大学2年生76名

調査実施日時：2023年6月26日 午前9時15分～午前10時

データ収集方法：Google form を使用

対象者は、幼稚園教諭免許に関わる2度目の学外実習「教育実習Ⅱ（日程：2023年6月5日～6月16日）」を終えた翌々週にこのアンケートに回答した。回答者はあらかじめ用意しておいたWEB上のアンケートフォームに、手持ちのスマートフォンで入力・回答した。

アンケートの設問と選択肢

- | | |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1) 今回の実習で何を学びましたか? 最も当てはまるものを1つ選びなさい。</p> <ul style="list-style-type: none">● 子どもへの関わり方● 子どもへの言葉掛け● 子どもへの援助方法● 連携してチームで保育すること● 設定保育の進め方● 子どもとのスキンシップの大切さ● その他… | <p>2) 今回の実習で成長できたことは何ですか? 最も当てはまるものを1つ選びなさい。</p> <ul style="list-style-type: none">● 設定保育の進め方● 子ども理解● 保育者の仕事理解● 連携してチームで保育すること● 子どもへの言葉掛け・スキンシップなどの援助方法● 話を聞く姿勢（子どもや保育者に対して）● その他… |
| <p>3) 教育実習Ⅱの授業で習ったことや実施した内容の中で役立ったことは何ですか? 最も当てはまるものを1つ選びなさい。</p> <ul style="list-style-type: none">● 実習日誌の書き方● 指導案の書き方● エピソード記録の書き方● 模擬保育● 子どもが大好きな遊び● 年齢別の子どもが好きな絵本・製作物● その他… | <p>4) 今回の実習を終えた今、まだ自分に不足していると感じることは何ですか? 最も当てはまるものを1つ選びなさい。</p> <ul style="list-style-type: none">● 一人一人の子ども理解● 連携してチームで保育するための協調性● 子どもの反応に応じた保育の進め方● 子どもが喜ぶ遊びを知ること● 日誌や指導案の理解● エピソード記録の書き方● その他… |

5) 教育実習Ⅱの授業でもっと教えて欲しいこと・実施してほしい内容は何か？当てはまるものをすべて選びなさい。

- 実習日誌の書き方
- 指導案の書き方
- エピソード記録の書き方
- 模擬保育を実施する機会
- 子どもが大好きな遊び
- 年齢別子どもが好きな絵本・製作物
- 設定保育の進め方
- 子どもとの関わり方
- その他…

6) 今回の実習期間中、自分が苦手なことに對してどのように向き合いましたか？200字程度で記入しなさい。

7) 今回の実習で特に気を付けたことは何か？200字程度で記入しなさい。

8) 今回の実習を終えた今、1年次9月の教育実習時の自分と比較し、成長できたと感じることは何か？200字程度で記入しなさい。

9) 今回の実習を終えた今、保育者の仕事にやりがいを感じていますか？その理由も含めて200字程度で記入しなさい。

10) 4回の実習の中で身に付いた、次の実習に活かせることは何か？200字程度で記入しなさい。

2 調査結果

調査結果を次に示す。設問1～5に関しては選択方式のため、グラフにして掲載する。設問6～10は自由記述方式である。回答の文中から回答頻度の高いキーワードをユーザーローカルAIテキストマイニングによって抽出し、記述内容の傾向を視覚化した(図6～10)。また、いくつかの回答については、後述の考察章で原文のまま掲載する。

図1: 1) 今回の実習で何を学びましたか？
最も当てはまるものを1つ選びなさい。

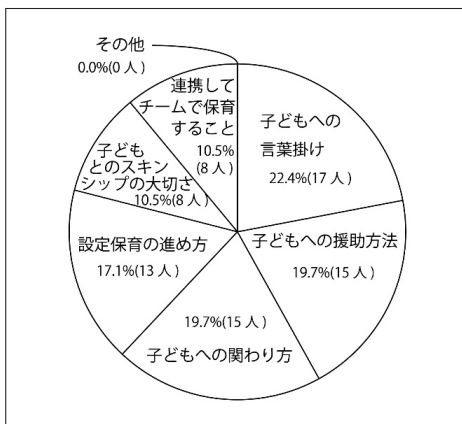


図2: 2) 今回の実習で成長できたことは何か？
最も当てはまるものを1つ選びなさい。

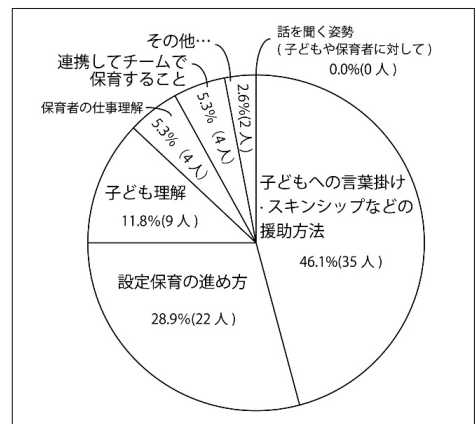


図3：3) 教育実習Ⅱの授業で習ったことや実施した内容の中で役立ったことは何ですか？最も当てはまるものを1つ選びなさい。

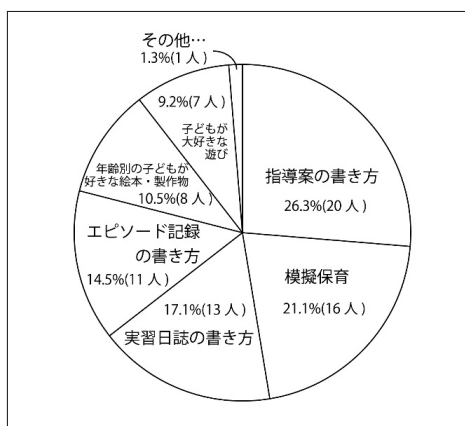


図4：4) 今回の実習を終えた今、まだ自分に不足していると感じることは何ですか？最も当てはまるものを1つ選びなさい。

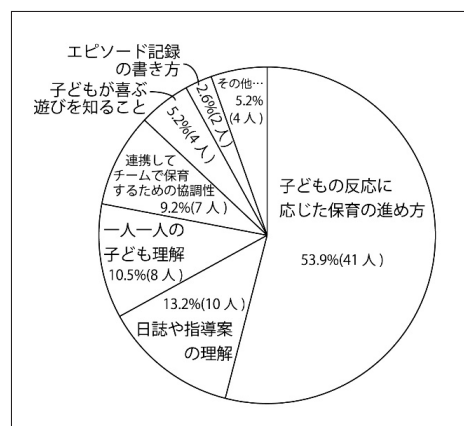


図5：5) 教育実習Ⅱの授業でもっと教えて欲しいこと？実施してほしい内容は何ですか？当てはまるものをすべて選びなさい。

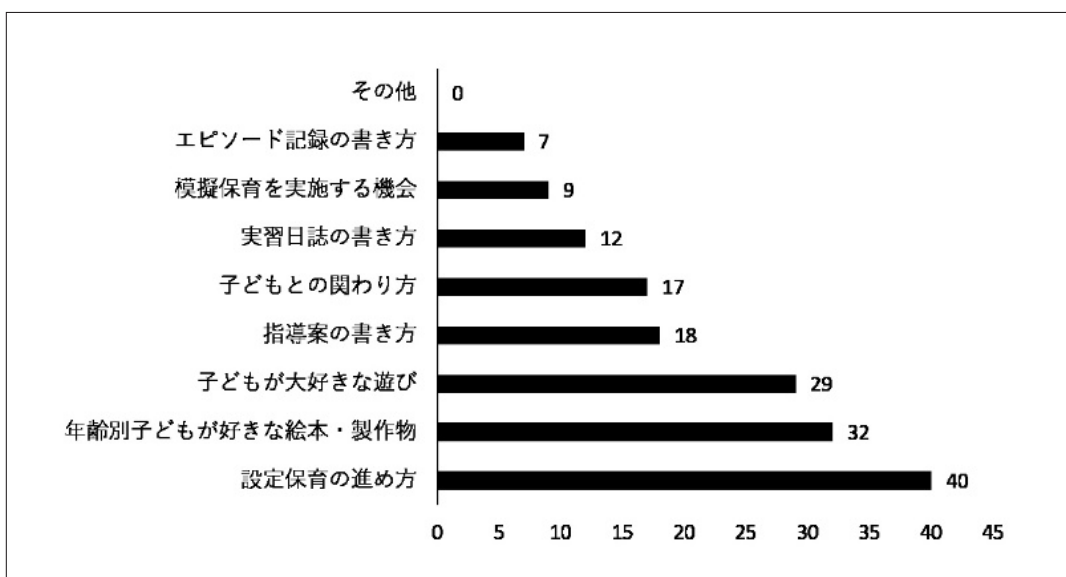


図 6：6) 今回の実習期間中、自分が苦手なことに對してどのように向き合いましたか？
200 字程度で記入しなさい。

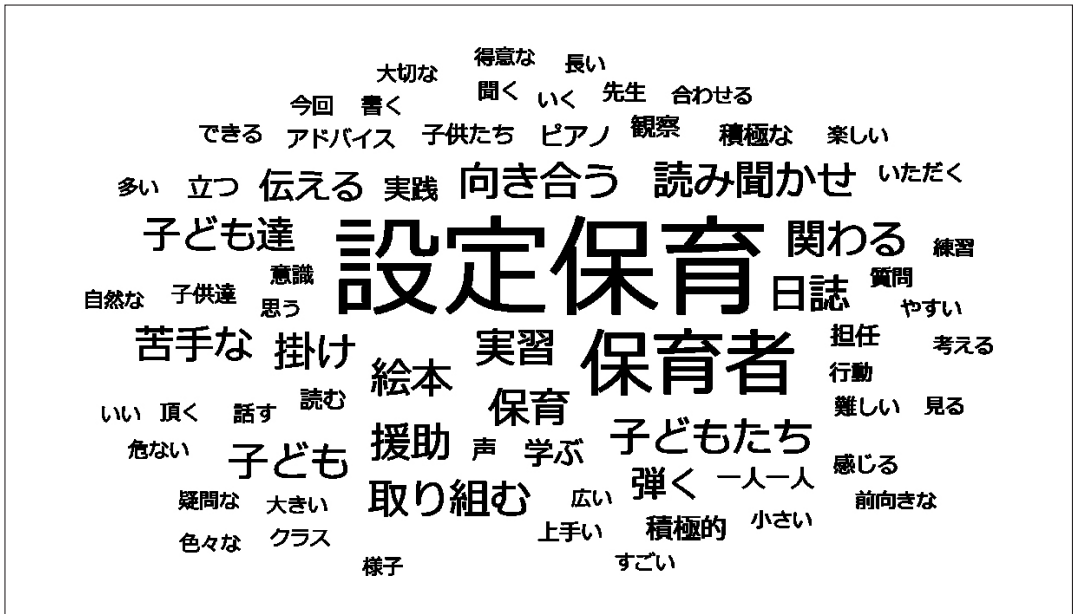


図 7：7) 今回の実習で特に気を付けたことは何ですか？ 200 字程度で記入しなさい。

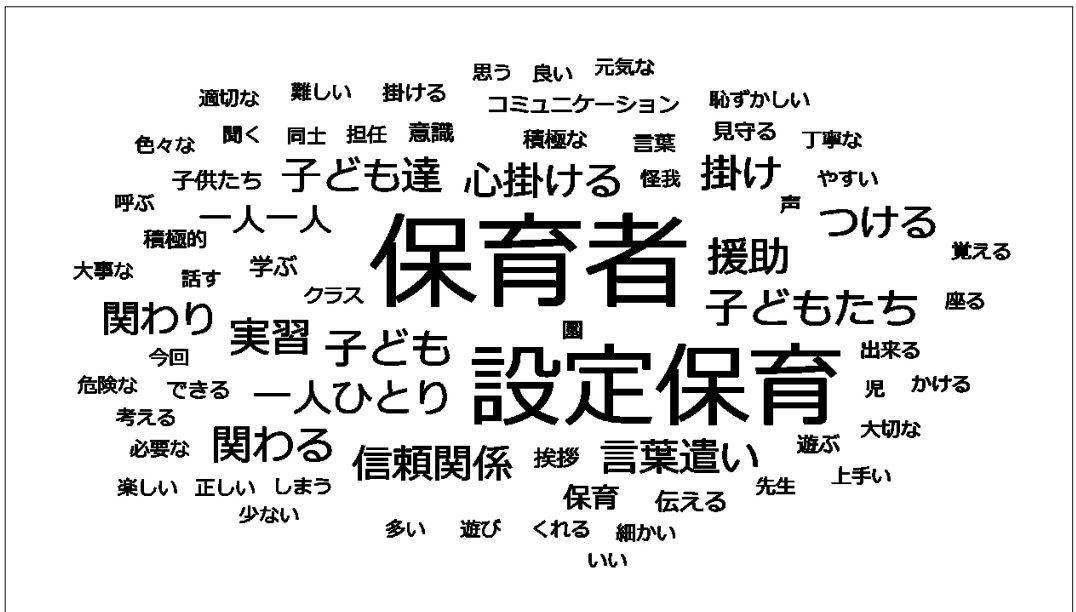


図 8：8) 今回の実習を終えた今、1 年次 9 月の教育実習時の自分と比較し、成長できたと感じることは何ですか？ 200 字程度で記入しなさい。

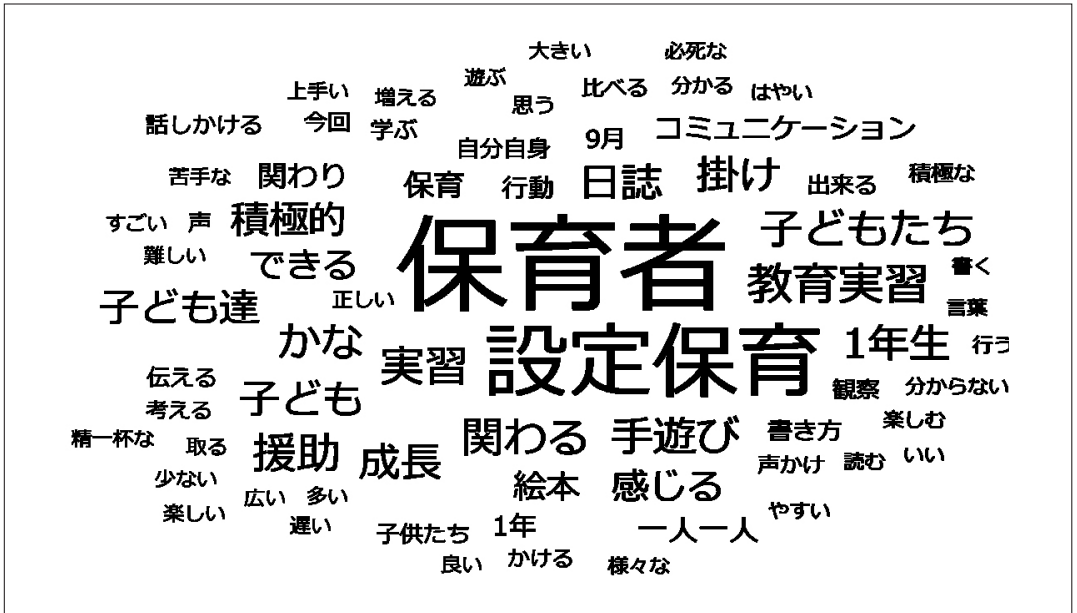
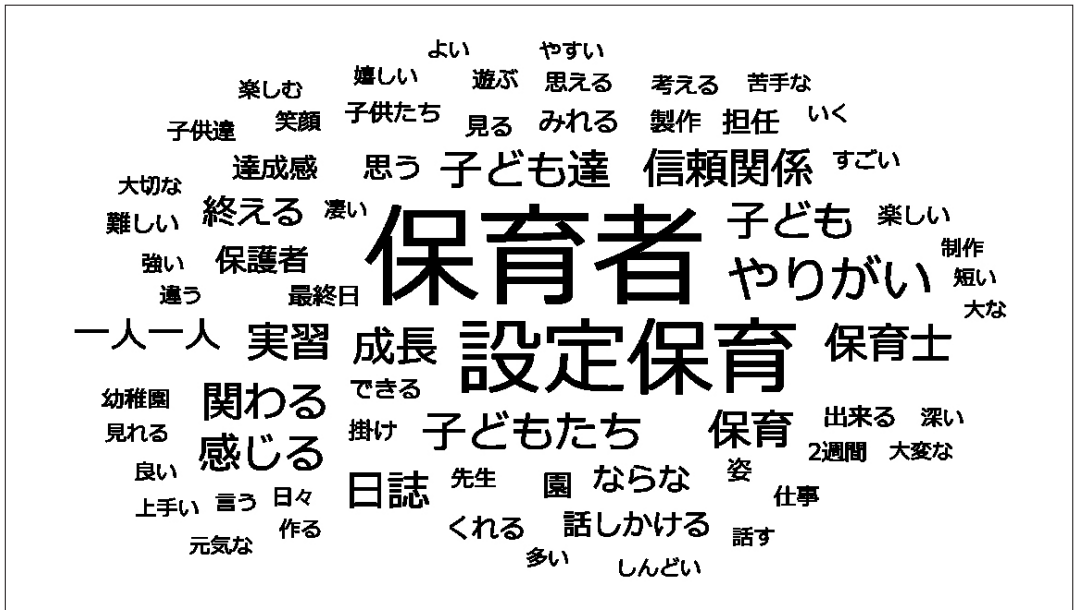
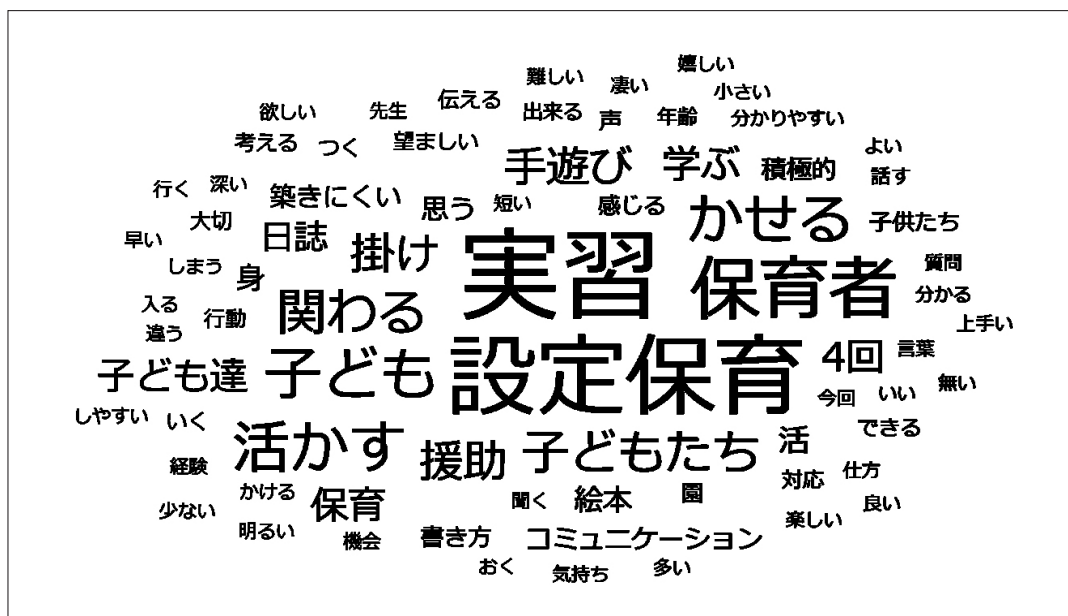


図 9：9) 今回の実習を終えた今、保育者の仕事にやりがいを感じていますか？
その理由も含めて 200 字程度で記入しなさい。



- 23 -



多くの設問において「設定保育」に関する回答が見られたことから、学生が「設定保育」に対して成長を感じたり課題を抱えたりしていることが伺える。次に多く見られた回答は、日誌・絵本という保育現場で役立つ技術や能力に関するものであった。

興味深い項目は、ある設問において回答の選択肢に、「保育者の仕事理解」や「連携してチームで保育すること」など協調性についての項目があったが、いずれも少数回答に留まった。このことから2年前期の時点において、学生は自身の保育技術や能力向上に主眼を置き、保育者の仕事理解やチームワークについてはあまり意識が向いていないことが伺える。

また、本研究は学生が教育実習の授業に対して何を求めているのかを明確にし、授業改善の根拠とするものである。授業で重きを置いた「日誌・指導案の書き方」「模擬保育の発表」については多くの学生が実習で役立ったと回答している。この点で現行の授業において一定の成果が挙げられているものと考えられる。一方で、「年齢別の子どもが好きな絵本・製作物」「子どもが大好きな遊び」については実習で役立ったと回答した学生は少数に留まったが、もっと教えて欲しい内容を尋ねる設問では多数を占めた。これらをかんがみ、内容について今後強化する必要があることが明らかとなった。

3 考 察

1) 「日誌・指導案の書き方」について

授業で何度も取り組んだ「日誌・指導案の書き方」については、多くの学生が実習で役立ったと回答している。しかし、授業内に行う指導において学生の理解度には個人差がある。その為、わかりやすい授業を心掛け、ビデオや事例を活用し、実習で対応できるようにしている。

また、実習日誌の記述の仕方にはそれぞれ園の方針がある。学生には、園の方針に沿って記述するよう伝えている。学生は日誌を書くことにプレッシャーを抱えており、日誌に要する時間は聞き取りによると3時間以上かかっており、寝不足といった身体的な負担や実習を継続できるのかという不安に繋がっている。

実習中は子どもが降園してから日誌を書く時間を設けている園もある。逆に貴重な実習だからこそ、子ども達と関わる事に配慮している園もある。また、学生は観察した子どもの活動を記述できても、その活動においての保育者の配慮を読み取ることが難しいため、授業ではできるだけ事例を挙げて学生自身が考える機会を大切にしている。

実習日誌の修正方法も修正テープ使用可、二重線をひいて訂正印を押すなど園によって方針が異なる。後に振り返っても自分の間違いに気づき、指導を受けた部分がわかるように、添削した部分は残し、赤文字で書き加えて修正するなど、本学の規定に沿った形の方が日誌を書くにあたっての学生の戸惑いは少ないかもしれない。

日誌の記入にかかる時間短縮のために、ポートフォリオやドキュメンテーション等、写真を取

り入れて記録を通してわかりやすく記録する方法も考えられる。又、幼稚園では、一人一人の子どもを深く観察して欲しいという思いからエピソード記録を書くよう指導している実習園も増えてきている。このような実習で印象に残った子どものエピソードとその考察を記述する形式は、子ども理解にも繋がる。

学生の自由記述で「毎日の日誌に苦戦することがあり嫌だなと感じることもあった。」「日誌を書くことが苦手ととても時間がかかってしまい、毎日しんどい思いをした日もあったけれど、毎日必ず提出することを心がけた。授業の時に教えていただいたことや日誌の書き方のプリントなどを参考にして毎日の日誌を書くことを頑張った。」等の記述が見られ、日誌を書く為に多くの時間を費やしたことがわかる。このような現状から、例えば1年生の実習は、1週目に1日の流れを書く日誌、2週目はエピソード記録を書き、2年生の実習では、1日目は1日の流れを書く日誌、2日目以降はエピソード記録を書くという、臨機応変な対応が必要ではないだろうか。

また、本学も採用している1日の流れを書く時間軸に沿って記載する日誌記載方式よりも、一人一人の子どもを深く見るエピソード記録式の日誌の方が、学生自身の子ども理解に繋がる可能性も考えられる。

2)「模擬保育の発表」「設定保育の進め方」について

授業では、個人で書いた指導案の添削指導を行い、学生同士が指導案に基づいて保育実践を行う模擬保育で学びを深めている。しかし、実際に担当クラスの子どもの様子を観察し指導案を考えなければ、子どもの興味・関心に沿った保育内容を記述することはできない。模擬保育をする為に事前に学生自身が保育内容を考える機会を持つことは、実習での臨機応変な対応、子ども理解につながる貴重な準備となる。その一方で、多くの学生は、模擬保育をすることに意義があると感じているにも関わらず、53%の学生は、設定の進め方を教えてほしいと記述している。

この点について考察を進めていく。模擬保育は保育者役、子ども役共に学生が行う。その為ほとんどの学生は、指導案通りに保育を進めることが出来る。しかし、実習で設定保育を行うと指導案通りには保育できず、想定外の子どもの反応に遭遇するが多い。

具体的な実習での事例を挙げると、学生が新聞遊びを行った際、子ども達がちぎった新聞紙をボールに見立て玉入れを行う予定が、新聞をちぎることに興味関心を持った子どもが多く、細かくちぎったためボールが作れなかった。そのためボール入れを楽しむのではなく、ちぎった新聞紙の片づけを楽しむという臨機応変な対応を行った。

全体を見て、臨機応変に対応できる学生ばかりではない。緊張していること、指導案の通りに進んでいないことが焦りに繋がり、想定通りの保育が出来なくなってしまうことも考えられる。そのような経験をした学生は、どのように設定保育をうまく進めることが出来るのかと頭を悩ませているようである。そのため多くの設問において「設定保育」に関する回答が見られ、設定保育の進め方を教えてほしいという学生が多いと考えられる。

それでは、授業で設定保育の進め方を伝えるにはどのようにしたらよいのであろうか。学生自身が記述した指導案の想定外を考え、その時にどの様に対応するのかを考える機会を設けることが必要である。

現状は、模擬保育をするに留まっているが、想定外の子どもの行動、それに対する保育者の対応をその都度考える機会を持つことこそが、臨機応変な対応に繋がる。また、模擬保育の発表においては、製作物に使用するパーツが小さ過ぎて子どもが飲み込んでしまうものを使用するケースや、自分で取り付けることの出来ない輪ゴム、テープ台の使用、ホチキスを使用している等、対象年齢の子どもに対する安全配慮が不足する保育内容も見られた。それらに関してはその都度アドバイスを行っているが、学生の完全な周知には至っていない。今後、自信を持って保育できるような授業実践が必要である。

3) 年齢別の「子どもが好きな絵本・製作物」「子どもが大好きな遊び」について

設定保育を経験しない学生、毎回の実習で設定保育を経験している学生など、実習に関する取り組み方には各園で差異がある。学生には、設定保育の実施を自身で申し出るように伝えてはいるが、全ての学生が設定保育を経験できているわけではない。

実習において絵本を読む機会は多い。しかし、「年齢別の子どもが好きな絵本・製作物」「子どもが大好きな遊び」についての授業の取り組みが、実習で役立ったと回答した学生は少数に留まった。そして、もっと教えて欲しい内容を尋ねる設問においては多数を占めた。

何故さらに学びたいと感じるのか、学生は実際に実習で実践してみて、自分の思うように保育が進まない経験を味わった時に、対象年齢ではなくクラスの子どものに合った保育の必要性を痛感する。指導案についても実際に担当クラスの子どもの様子を見たうえでのプランを考えなければ、子どもの興味・関心に沿った保育内容を報告できないと記述した。当然ながら保育内容も同様であり、子どもの様子を見て、絵本、製作物、遊びを考えなければ、子どもの興味・関心に沿ったものにならない。そのため、出来るだけ多くの絵本、製作物、遊びを知ることが学生の自信に繋がる。学生の意見を今後の授業に活かし、子どもの興味・関心に沿った保育に繋げていきたい。

4) 周囲を見る心の余裕

「6月の教育実習で特に気を付けたことは何ですか?」という自由記述に対して「子ども理解」「子どもへの言葉掛け」「言葉遣い」等の回答が多く見られた。特に「子ども理解」は36%を占め、「子どもの喧嘩の仲裁に入った時に両方の気持ち、考えをきちんと聞いてから解決することに気を付けていました。すぐ止めることに必死になってしまうと子どもが言いたいことを言えなくなってしまう、納得のいく解決が出来ないと感じていたので、玩具の取り合いになった際にはどちらが先に使っていたものなのか、両方に聞きながら時間を決めて交代をするように声掛けをしました。」「今回の実習で特に気をつけたことは、子どもの気持ちを聞くということです。2月の実習で、

全ての子どもの気持ちも聞くことが大事だということを保育者から助言していただきました。その言葉から、子どもの思いを理解したいと思い実践しました。活動に取り組むことが難しい子どもには、やろうねという言葉掛けを今までしていましたが、どうしたの？何かあったの？と聞くことで、子どもを理解し、寄り添うということに繋がったのではないかと感じます。」などの記述が見られた。

学生の記述から、けんかの仲裁や子どもの気持ちに寄り添うことを通して、子ども理解に繋がっていることがわかる。子ども理解、子どもへの声掛け等はコミュニケーション、スキンシップという面では重要である。しかし、「保育者の仕事理解」や「連携してチームで保育すること」など協調性については、少数回答に留まっている。

その理由の一つとしては、実習日誌に書かなければならない時間の流れを気にするあまり、全体を見る余裕がなく自身の周囲にいる子どもとの関わりが多くなっていることが考えられる。1日の流れを書く日誌よりも、一人一人の子どもを深く見るエピソード記録を日誌に取り入れる方が全体を見る余裕も生まれ、「保育者の仕事理解」や「連携してチームで保育すること」の理解にも繋がる可能性があるのではないだろうか。

4 課 題

アンケートを行い、その結果から我々実習担当4名が考察した課題を以下に記載する。

1) 日誌の書き方

多くの意見が寄せられた日誌の書き方については前述でも触れているように、これまでの担当者も同様で、どのように興味関心を持って書く力を付けるよう指導するべきか、以前から頭を悩ませる項目である。

字数が極端に少ないケースや助詞の使い方、ひらがな表記ばかりのものなど、現場の先生方に添削してもらうのが申し訳ないと思うケースも多くみられる。学生アンケートの中には「日誌の指導が実習で実際に役に立ちました」という記述も少数あるが、そのように記載を行う学生は書く作業が苦手ではないため、積極的に我々へ意見を寄せることに繋がっている。

2) 日誌の構成

学生の最も苦手とする文章作成等の作業を、いかに興味深く取り組む方向に導き実行できる日誌の構成が課題となる。スマートフォンやパソコンの普及により活字離れが進み、小学校からタブレットの学習が行われ、現在では小学校における通知簿などもパソコンでの打ち込みが多くみられる。やがては実習日誌も手書きではなくなる時代が来ると考えられる。

また、パソコンよりも普及率の高いスマートフォンでの打ち込みができるソフトの開発が進め

ば、学生の実習ストレスを軽減させることにも繋がる。しかし、日誌を書くためには、まず文章力が求められる。時間軸やエピソード記録、気づきを書くなどの文章表現力は、小学校から培ってきた読み書きの積み重ねが必要である。それを補うにはいつでも日誌の記載や内容の振り返りができよう文章校正や書き方、書き順が具体的に理解でき、認識及び実行に繋げる授業を実施していくことが必要だ。

また、日誌に関しては各園によって書き方にばらつきがあり、書式や観点など、書くスタイルが全く異なるケースが存在する。大阪府幼稚園連盟などでは書式を統一し、実習生に対する日誌負担軽減を考慮した連盟独自の書式が存在する。その効果は学生によっては有効かもしれないが、その定型に記載するにはある程度の文章力や理解力がないと書くことが難しいという点があり、学生の資質により難易度が変わってくる。

3) 日誌への不安

「日誌を実際に書くときに、授業でも教えてもらったこともあり実習でも役立った」と答える学生がいる。連続するそれぞれの実習日誌に関しては、初日こそ書くことがたくさんあるが、日を重ねるごとに同じことの繰り返しとなり、それに関して角度を変えた視点で記入することに戸惑いを感じるケースや、担当教員が朱書きで訂正する事が度重なると自信を無くし、実習に向き合えなくなるケースも珍しくない。

また、学校で習った書式と大幅に違う形式での日誌を書かなければならないケースや、受け持った担任や実習指導者との書き方の相違により、うまくまとめきれない日々が続いてしまう事などがある。

現状の課題としては書けない及び書き方が分からないなど、日誌への不安を抱えている学生が多数存在する。学校で教えている日誌の指導時間は年々長引いている傾向にある。また、現場からは「学校で書き方を習っていないのか？」など、実習訪問時に園長や実習担当に問われるケースもあり、保育そのものよりも日誌で頭が真っ白になってしまい実習どころではないという学生の不安を、我々教員がどのように取り除き、前に向かせることが出来るかが課題である。そのためには学生一人一人の状況に合わせた授業を行う必要がある。

4) 子ども一人一人への対応と理解

実習を行う上で声掛けやけんかの仲裁などに関しても、その時々によりケースの違いがあり、学生からどうすればいいかと相談されることが多い。現場の保育士の「なるほど」と思える声かけは、インターンシップでの日誌ではたくさんみられるが、2週間の教育実習などにおいては一人一人の子どもを観察し、子ども理解に繋がるまでに時間がかかることなどから、記載できないことも多い。

5) 疑問点の解消

机上では実践することが出来ない子どもへの対応や声がけ、その場その時におけるケースの違いがあり、学生は自分の発言や行動がこれで良かったのか？と悩む。しかし実習現場では担任も実習指導担当も日々忙しく保育を行い、常に子どもと関わっている事もあり、その時々質問を遠慮して聞く機会を逃してしまい、次第に記憶も薄れ、分からないままの状態課題解決できない学生もみられる。

そのような学生たちにとっての課題解決ができるように、授業において出来るだけ具体例を挙げ、保育者をよく観察し、子ども一人一人によって対応が違うことを理解する必要がある。子ども理解に繋がる授業が喫緊の課題だということが確認できる。

6) 設定保育

最も質問の多い設定保育においては、実習を想定して授業実践を行い、設定保育に対する不安を取り除けるように授業時に設定保育を行い次の実習に備えている。しかし、実際の現場では担当保育士や実習担当者などの助言により用意していたものをクラスや年齢に合わせて変化しなければならないケースもあり、そのことが原因で後の実習に負担を感じ、頭を悩ませ、その後の設定保育が難しくなるケースもある。

設定保育を授業内で多数行い、その場に応じた設定の引き出しをより多く持てるように授業を行うことが必要である。また、クラスの子どもの状況に合わせた保育を考えることや、深い観察力と年齢別の臨機応変な対応が必要となる。

7) 保育実習との連携

2年間の本学での実習は、現行1年次9月に教育実習Ⅰ(幼稚園)、10月～11月に保育実習Ⅰ(施設)、2月保育実習Ⅰ(保育園)、2年次では6月に教育実習Ⅱ(幼稚園)、7月保育実習Ⅲ(施設)※選択、9月保育実習Ⅱ(保育園)を行っている。

ひとつの実習が終わると次の実習がはじまり、それぞれの授業で以前の実習を振り返り、それをどのように補うかを連携する協働作業が必要となる。これらをいかに精査し、年間30回の授業でいかにうまく展開できるかが改善ポイントである

8) 実習窓口

現在の実習においては、実習専用の携帯電話を担当者が当番制で持つことにより、実習期間中の学生サポートを行っているが、学生から通話する場合、通話料金の負担やこんなことを聞いてもいいのか？という戸惑い、担当者との相性や話しやすさなどの事情により実習携帯へのアクセスを行わない(行えない)学生が存在する。

それらを解消するためには、実習中に学校を頼って質問ができる場所(窓口)やサポート体制

が必要だと考える。オンラインなどで対応を行うことで解消につながるものや、やり取りができるようにするシステムの構築が今の時代には必要となってきた。

9) 授業配分

教育実習の性質上、1 年次においては実習に対する心得やマナー、9 月の実習に向けて実習現場の実態を把握し、日誌の書き方や 1 日の流れ、子ども理解などを学習する。また、前期の実習直前においては常識を身に着けるための心得テストを行い、その結果が 8 割に満たない点数の学生には再テストを実施している。

その後、実習で体験したことをもとに振り返りや現場での事例、指導案の書き方など、2 年次 6 月に行う実習に向けて、学生自らが実践及び観察を行い、色々な視点から保育士の引き出しの構築を行う。

これらに取り組む意欲は学年によっても違いがあり、どのようにウエイトをおいて授業を進めていくかの配分がその年々によって変わる。その年々の学生の動向と意欲、先生になりたいという思いをくみ取るために、今回のようなアンケートを毎年継続して行い、授業配分を担当者と相談し、授業改善に備える必要がある。

おわりに

今回のアンケート結果をもとに、授業への振り返りを行うことで新たな課題を見つけることにつながると同時に、それを精査し次年度へつなげることが改めて必要だと実感した。保育士養成においては机上の学びだけでなく、実践の場での学びがあることは大きく、現場実践することで学生たちの目の色がより輝いている。また、学生自身が振り返りを行うことにより、実習の学びと評価、今後の事前・事後指導の充実に繋げていくことができる。

実習や保育士養成においては、養成校と実習施設との連携及び協働が必要不可欠である。養成校における実習指導を今後さらに検討していくとともに、実習施設との連携の具体的な在り方や学生が全体を見るゆとりが持てるよう、日誌についての再検討を行い、自信を持って実習に向かえる授業内容の検討が必要である。

また、WEB からの情報が当たり前になってきている学生たちにとって、日常の常識や実習での心構え、園でのルールや設定保育の方法などを言葉で伝え、いかに分かりやすくかみ砕いて丁寧に説明し理解できるかを実現しなければならない。特に実習日誌の書き方に関しては、書けるという自信と安心感を持たせ実習に挑むことが出来るようにすることが急務である。

核家族化が進み会話を行う機会が益々減ってきている学生たちにとって、言葉がけやコミュニケーション能力、その場その時の臨機応変能力、ケンカの仲裁などの場面に応じた判断力、振舞いなど、体験をする前にこんなケースがあるということを授業時に多数事例紹介し適応力を身

に付けておくことが大切だ。

また、2 年間という短い期間だけでは育てられない保育力に関して、保育現場と養成校との連携を綿密に行い、協働して両側から保育士を育てていく必要性がある。

これらの課題を精査し、見通しを持って実習を経験できるようにすることは、保育士へ憧れ、自分もこんな保育士になりたいと思い養成校を志望した学生への質の保証であり、我々教員はその気持ちに真摯に応えなければならない。実習に向かう学生の安心感を満たし、保育士の人材確保につながることを目標として、保育士不足といわれる昨今の保育業界の発展に貢献していきたい。育児がしやすい世の中と共に連携できるよう、実習担当としてこれからも学生たちに寄り添いサポートしていきたい。

参考文献（著者五十音順）

- 濱田尚吾，荒木隆俊，太田裕子．短大生の幼稚園教育実習における事前指導内容の検討羽陽学園短期大学紀要．2012，9，2，29-35.
- 長谷秀揮．保育実習Ⅱの「振り返り」と「課題」についての一考察四條畷学園短期大学紀要2016，49，9-18.
- 木内英実，増田まゆみ，西方栄．実習日誌を通しての子ども理解の変化—保育者養成における実習教育—日本保育学会大会研究論文集．2000.608-609.
- 栗原多恵．幼稚園における教育実習指導の実態—実習の振り返りを通して—佐野日本大学短期大学研究紀要．2022，33，1-17.
- 永野典詞，香崎智郁代．幼稚園教育実習における学生の学びに関する意識調査心理・教育・福祉研究2021，21，1，1-12.
- 増井啓子．アンケートから見える教育実習指導の学びと課題—実習事前指導・実習・実習事後指導を通して—奈良佐保短期大学研究紀要．2018，87-101.
- 丸山笑里佳．保育者養成校の実習における学生の体験と授業での学び—実習での困難感と学んでいてよかった内容に注目して—岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要2022，55，119-125.
- 葉原桂子，小林美花幼稚園教育実習・保育所実習における指導案の現状と課題北翔大学短期大学部研究紀要．2017，55，139-145.
- 大谷彰子，平化恵美子．保育者養成課程における実習に対する課題と不安の変容甲子園短期大学紀要．2012，30，67-73.
- 杉山佳菜子，小川真由子，榊原尉津子．保育実習の振り返りと自己評価（3）鈴鹿大学・鈴鹿大学短期大学部紀要人文科学・社会科学編．2018，1，185-196.

(ゆい ひろたか：教授)

(やまだ ちさと：准教授)

(しばた せいいち：講師)

(さとう よしえ：講師)